

ファンタスティック・ピアノ・コレクション 2010【中級～上級編】

1. スマイル/ロッド・スチュワート

SMFあり ★☆☆

原曲は喜劇王チャップリンの作曲による、映画『モダン・タイムス』のテーマ曲。ここでは、ロッド・スチュワートの歌によるしっとりとしたカバー・バージョンをもとにしています。ピアノ演奏にあたってもそれらしく、甘美なイメージをもって弾き始めましょう。バウンス表記となっていますが、きっちりと三連符でとるのではなく、気持ち緩めにバウンスすることがポイントです。イントロで曲の雰囲気をつかんでそのまま[A]からメロディーを乗せていきます。[B]からは少しずつメロディーをフェイクした装飾的なパッセージが出てきますが、力まず、常にこの曲の持つ大らかで温かみのある流れの中で弾くとスマートに決まるでしょう。

2. ロンドンデリー・エア/アイルランド民謡

SMFあり ★☆☆

「ダニー・ボーイ」の題名でも知られる、アイルランドの民謡です。日本から遠く離れた国で生まれた曲であるにもかかわらず、どこか日本の童謡を思わせるような懐かしさを感じさせるメロディーが特色です。終始一貫してレガートのつながりを大切に、メロディーの持つ郷愁や叙情的な深みを表現しましょう。[D]からの転調により、同じメロディーながら描く世界がガラリと変わります。その他、セクション区切りごとの小さなテンポの変化や音域の変化を効果的に生かし、1曲の構成を作り上げましょう。また、旋律が複数の声部に分かれている多声的な部分が多いので、各声部にまたがるフレーズが途切れ途切れにならないよう注意しましょう。

3. 風になりたい/THE BOOM

SMFあり ★☆☆

全体を貫くサンバのリズムが爽快です。イントロはギターのカッティングとスルド（大太鼓）のイメージで、ここでリズムのニュアンス、音量のバランスをしっかりと組み立てることで、全曲のリズム感が生きてきます。曲中にもしばしば出てくるコードの刻みはあくまでも軽く、ベースのオクターブのパターンは常に2拍目・4拍目に重みがあるような意識を持つと良いでしょう。また曲の区切りでのアクセントのついた3連符は「キメ」となる部分で、強くしっかり鳴らします。「I.」内のFreelyの部分は、打楽器のアンサンブルで盛り上げる箇所です。リズムを強調したフレーズや和音を適入して、賑やかにしてみましょう。

4. 交響曲 第5番 嬰ハ短調 第4楽章/G.マーラー

★★★

この美しい「アダージェット」は単独で演奏されることも多く、映画などにもしばしば使われてきました。旋律はストリングス、メゾ・スタッカートのアルペジオはハーブを表現しており、これらオーケストラの各楽器の音色を譜面から感じとりながら弾きましょう。調号の少ないハ長調ではあるものの、随所に臨時記号によって不協和音が作られ、緊張感が生み出されています。それらと緊張を解く協和音との対比をうまく引き出すなど、細かいフレーズの息づかいやダイナミクスの変化をしっかりと表現し、さらに終盤に一度だけ現れるffまでの流れ、その後収束していく流れをよく組み立てて構成感のある演奏をしましょう。

5. チェンジ・ザ・ワールド/エリック・クラプトン

SMFあり ★☆☆

R & Bサウンドに乗ってブルースを奏でるフィーリングで、格好よく弾いていきましょう。左手のリズムパターンはノリを出す上でとても重要です。アルペジオの箇所以外はノン・レガート気味にし、キレの良さを出しつつも十分な「粘り」を持って、リズムが細切れにならないようにしましょう。[D]ではミュージックデータのブルースハーブがメロディーを出してくるので、ピアノはそれをなぞる役回りです。[B]へのリピートでピアノがメインに戻る際には十分に存在感を出して入りましょう。ソロの掛け合いとなる[E]では、バックのメロディーをしっかりと聴きつつアンサンブルを楽しんでください。エンディングの3小節は流れるようなソロを聴かせて堂々と締めくくりにしましょう。

6. モンタギュー家とキャピュレット家～組曲「ロメオとジュリエット」より/S.プロコフィエフ

SMFあり ★☆☆

ロシアの作曲家プロコフィエフの管弦楽組曲「ロメオとジュリエット」の中でも特に有名な曲で、もとは同名のバレエ音楽の1シーンとして作曲されました。時折激しく音がぶつかるバーバリズムを持った曲ですが、ずしりとした重々しさを表現するために、力強いタッチで、しかし乱暴にならないようにしましょう。[C]からの左手のメロディーは、原曲の金管楽器（チューバやトロンボーン）の重みのある音をイメージして弾くとよいでしょう。[F]からは打って変わって静かで繊細な楽想になります。それまでとのコントラストを考え、フルートを連想させるソフトなタッチのレガートで弾きましょう。

7. TODAY YOU'RE MINE／ジャニス・イアン

★★☆

ジャニス・イアンの美しいピアノ・バラードです。古い作品ですが、CM 曲となったことで日本で CD 化されました。シンプルな弾き語りをイメージしたアレンジなので、メロディーを語りかけるように、情感豊かに演奏しましょう。特にメロディーの音域が低い箇所では、伴奏（内声）とメロディーとのバランスに十分に気を配ることが大切です。全体的には、バラードとはいえ決して弱々しい雰囲気にならないように、テンポの芯をしっかりと保ちつつも、セクションの区切り目では自由に *rit.* するなど、自然な揺れ・呼吸を表現すると、歌のニュアンスがよく出るでしょう。

8. Someone to Watch Over Me／G.ガーシュウィン

★★☆

ミュージカル『オー、ケイ』の挿入歌として作曲されたバラードで、ジャズのスタンダードとして多くのアーティストに演奏されています。ヴァース（導入部）の **A**～**B** の *Tempo Rubato* の解釈は、たっぷり歌うというよりは、ある程度のきびきびとしたテンポ感を持って、語りかける、あるいは彷徨うような気持ちで揺らすのが良いでしょう。**C**からは4ビートのリズムがベースになっていますが、ここでは必ずしも正確に一定のテンポで通さず、フレーズの歌い方に応じて自由に緩急をつけることも可能です。八分音符・付点音符・三連符の使い分けについても、曲の緩急の中での音符に表せない「バウンスのニュアンスの変化」として表現できると良いでしょう。

9. Someday／EXILE

SMF あり ★★☆

EXILE の持ち味であるダンサブルなグルーヴ感溢れる曲です。豪快に、スピード感をもって演奏しましょう。譜面にはメロディーとベース、コードの伴奏部分に加え、メロディーの間を埋める“合いの手”など、さまざまな役割を持つ要素が次々と現れます。これらの多くの要素が煩雑に聴こえないよう、タッチや音量に差をつけるなど、しっかりと区別することが大切です。全体を通してメロディーが一本の線として流れるように意識すると良いでしょう。**G**では曲調が変わり、いったん静かになりますが、ダンスミュージックとしてのビートを常に感じながら、しっかりとバックギンに乗って演奏してください。

10. 愛のワルツ／J.ブラームス

SMF あり ★★☆

16 曲からなる連弾曲集「4 手のためのワルツ集 Op.39」の 1 曲です。ブラームス自身によるピアノ独奏編曲のほか、管弦楽などさまざまな編曲で耳にすることができます。簡素でありながらも、ブラームスらしい重厚な響きを持った美しいワルツです。厚みのある和音が多用されていますが、和音の響きが重くなるとワルツらしいリズムの流れを失ってしまいがちです。そうならないように、大きなフレーズを常に意識して演奏しましょう。**D**からは左手にメロディーが移りますが、たっぷりと歌い、右手のトリルや装飾的なパッセージに埋もれないよう注意しましょう。

11. ワン・ノート・サンバ／A.C.ジョビン

SMF あり ★★☆

タイトル通り、同じ音が続くメロディーに対してコードが移り変わるテーマが独特です。その特徴を生かすため、トップのメロディーを十分立たせるとともに、メロディーらしい表情をつけて弾いてみましょう。テーマ部分では **A**、**C**が縦のリズム、**B**が横の流れ、というくっきりとした対比になっているので、これをスマートに表現することもポイントです。縦で揃える部分では、スタッカートになり過ぎないように適度な音価を保つこと（ただし軽さは失わないように）が、前述のメロディーの表現においても、ボサノバらしいリズム感を出すという点においても相応しいでしょう。

12. 天地人～オープニングテーマ～／大島ミチル

SMF あり ★★☆

大河ドラマのオープニングらしく、歴史のスケールを感じさせる壮大な楽想が特徴です。曲の主要なモチーフである **A**、**E**、**H**、**J** のパターンは、あまり力みすぎないこと、また 2 小節目の休符が突っ込まないようにすることがポイントです。**C**の左手の低音は、大太鼓を思わせる鋭さでパーカッシブに、また、左手の 2 つのパートが区別できるようにペダルを加減しましょう。メロディーをレガートで歌う部分はたっぷりと歌い、また随所にある 16、32 分音符などの飾りのフレーズは吹き抜ける風のように滑らかに弾きます。全体にエネルギッシュな演奏が求められますが、いつも頑張り過ぎないように、余裕を持って演奏するようにしましょう。

13. アンフォゲッタブル／ナット・キング・コール

SMF あり ★★☆

1951 年に発表されたナット・キング・コールのジャズ・ヴォーカルのスタンダード。彼の死後、娘のナタリー・コールとのバーチャル・デュエット盤が再びヒットしました。ここでは多少コードをリハーモナイズし、ジャズ的なアドリブフレーズを随所に挿入するなど自由な雰囲気のアレンジとなっています。基本となるコード、メロディーの流れを見失わないように、フレーズ間のバランスをよく考えて演奏しましょう。**A**～**B**は十分に「間合い」を感じ落ち着いて、**C**のアドリブからの *Poco più mosso* は、テンポの変化としてはわずかですが、やや開放された感じとして表現すると良いでしょう。テーマに戻る **D**ではきっぱりとダイナミックにまとめます。

14. 翼／KOBUDO-古武道-

★★★

尺八、チェロ、ピアノのユニット「KOBUDO-古武道-」の躍動感あるインスト曲です。演奏表現においては、ただ単に各楽器の入れ替わりを表現するだけではなく、ピアノ曲としてまとまるように意識すると良いでしょう。例えば[A]ではダイナミックなオクターブ奏法をしっかりと立たせ、[B]、[E]に入る際のレガートへの変化や、[C]、[F]での刹那的な *p* とのコントラストを美しく表現します。[G]からはエンディングに向かって穏やかな曲調が続きますが、左手のアルペジオは一定のテンポで演奏し、右手は鳥のような自由なイメージで軽やかに飛翔し、最後は余韻を感じながら静かに閉じます。

15. ワルツ～組曲「仮面舞踏会」より／A.ハチャトゥリアン

SMFあり ★★★

もとは同名の戯曲の劇音楽として作曲されたもので、1曲目「ワルツ」はフィギュアスケートの浅田真央選手の使用曲としてもお馴染みです。原曲の絢爛豪華でどっしりとした雰囲気を出しつつも、左手と右手が相互にフレーズを補っている箇所など、ピアノスティックな聴かせどころもしっかりと演出しましょう。まずはワルツの基本として、左手の1拍目でベースを支え、2、3拍目は少し力を抜いて刻む、という動作を練習すると良いでしょう。ピアノソロという制約上、この刻みの部分が省略されている箇所も随所にあります。そのことを感じさせないように、最後まで常に勢いを持って演奏してください。

16. CANTALOUPE ISLAND／ハービー・ハンコック

SMFあり ★★★

ハンコックの代表曲の一つで、1964年のオリジナル録音の他にいくつかのライブ・バージョン等が発表されています。わずか3つのコードから成る12小節のテーマですが、ファンク的なリズム、モード（旋法）に基づいた特異なコード進行やスケール感が先鋭的です。[B]からは本人のアドリブの一例をほぼ忠実に再現し、どんどんコードから外れていくようなスケール使いや一時的なリハーモナイズが見てとれます。演奏においては、そういったフレーズの難解さに気をとられ過ぎず、良いノリで曲のリズムに合わせる事が重要で、特に、八分音符のリズムの背後にある潜在的な16分のビートを意識したフレーズの乗せ方がコツになるでしょう。

17. RED CLIFF ～心・戦～／alan

SMFあり ★★★

『三国志演義』に題材をとった映画『レッドクリフ Part I』主題歌です。内省的な単旋律に始まり、抒情的な12/8拍子のメロディーから大きな盛り上がりを経て最初の旋律が静かに再現する、というドラマチックな構成を持っています。壮大な映画のストーリーを思い浮かべながら、この大きな起伏の流れを存分に歌い上げましょう。12/8拍子のアルペジオの伴奏形は、八分音符・16分音符の箇所ともに、大河の流れのような大きな「揺らぎ」を感じて弾きましょう。全体のクライマックスである[E]では、エスニックで力強い高音のフェイクをたつぷりと響かせたいところです。左手の伴奏に負けないように音量に注意し、十分なエモーションを持って表現しましょう。

18. f／松下奈緒

★★★

女優・ピアニストの松下奈緒のオリジナル作品。音の密度が非常に高く、アクロバティックな演奏が印象的です。まずは[A]から現れる特徴的なリズム動機をしっかりと手の内に収め、この部分をしっかりと鳴らすことで、この曲らしさを表現しましょう。このリズム動機はマルカートではっきりと弾くと効果的ですが、曲中、時にはペダルを駆使して大胆に響きを充満させても良いでしょう。中盤は一旦静かな雰囲気になりますが、テンポを落とさず常に前へ向かっていく力を持続させていきましょう。[C]は幻想的な雰囲気の中でリズム動機が復活します。メロディーに表情をつけ、リズム動機を効果的に響かせてください。

19. キャラバン／D.エリントン

SMFあり ★★★

デューク・エリントンの名曲で、民族的なメロディーやリズムを取り入れた「アフロ・キューバン・ジャズ」とも呼ばれる分野の代表曲でもあります。ここでは、カントリーのような味わいも含んだ一層ボーダーレスなアレンジとなっています。また、曲全体が *pp* から *ff* までという一つの大きなクレッシェンドの流れになっている構成がユニークで（ラヴェルの「ボレロ」を想像すると良いでしょう）、その長さをよく考慮した強弱の配分が重要です。リズムは基本的に4ビートで、左手のベースではしっかりと裏拍を感じて弾くことで幾分「粘り」のあるグルーブ感を出し、[J]の *molto rit.* 直前まで、強さは変わってもずっと一定のビート感を維持しましょう。

20. ピアノ協奏曲 第1番 木短調 第1楽章／F.ショパン

SMFあり ★★★

ショパンの「ピアノ協奏曲第1番」からの抜粋です。原曲におけるピアノの演奏パートだけでなく、オーケストラの各楽器のパートをよく研究し、響きを思い浮かべながら、堂々とした演奏に仕上げてください。ミュージックデータのテンポは原曲の指示よりやや遅めですが、このくらいのテンポが一般的には耳馴染みがよく、弾きやすいと思われます。また、楽譜上特に指示はありませんが、自然なテンポの変化を必要とする箇所が多く出てきます。特に、[D]から[E]、[G]から[H]など、曲想が大きく切り替わる場所では、きっかけをよく把握し、しっかりと間を取って合わせましょう。